

「初等体育」「体育実技」「保健体育理論」の授業を活用した
小学校教員養成課程学生の適応および教育的成長支援に関する実践研究

－ 新入生歓迎球技祭における臨床・教育心理学的な効果の検討 －

Practical and educational evaluation of the Adaptation Support Program
for students in a primary school teacher education program
utilizing physical education related courses

－ Analysis on the clinical and educational psychological effects of
a ball game festival welcoming first-year students －

須田和也・小川拓・小泉晋一・和井田節子

Kazuya SUDA・Hiroshi OGAWA・Shinichi KOIZUMI・Setsuko WAIDA

概要

本研究は、共栄大学教育学部1年生の適応支援を目的とした「新入生歓迎球技祭」の教育的成果を分析検討したものである。教員は、2年生有志による球技祭実行委員会の企画運営を支援するとともに、1年生には体育関連の授業にも関連させるというかわり方を行っている。今まで球技祭を実施した学年は退学率が低く、実行委員の2年生の成長支援にもなっていた。そこで、2016年5月の球技祭を対象に質問紙調査を行った結果、1年生には大学への親近感や所属意識の高まり、友人関係の形成に寄与していることが確認された。また、2年生の実行委員会の学生にとっては、プロジェクトマネジメントのリテラシを学ぶ機会になっており、教員が学生の主体性を尊重しつつリテラシを教え、球技祭の企画運営を任せるといった支援スタイルの有効性も確かめられた。

キーワード：適応支援 小学校教員養成 プロジェクトマネジメント

Abstract

This study analyzes the educational effects of the ball game festival welcoming the first-year students in the Faculty of Education, Kyohei University. Faculty members supported the second-year student committee to plan, organize, and manage the festival as well as ensuring the festival activities connected with the contents of the physical education courses. After the first year of the festival, the ratio of drop-outs has decreased. This event also provided opportunities for the second-year students to develop and mature. Results of the survey conducted to evaluate the festival in May, 2016 showed that the first-

year students built positive association with, and sense of belonging to the university; and better personal relationships with other students after the ball game festival. The second-year students reported that the event was an opportunity to develop project management competency. These reports confirmed the effectiveness of the current support styles that are to respect students as protagonists, and to teach necessary competency for students to use in planning and organizing the ball game festival.

Keywords: adaptation support, a primary school teacher education program, project management, a ball game festival

目次

1. はじめに (和井田 節子・須田 和也)
2. 球技祭の企画・運営への支援に関する実践報告 (須田 和也・小川 拓)
3. 球技祭での経験とその意義および効果の広がりについて (須田 和也)
4. アンケートの結果からみる球技祭の心理学的効果 ー量的分析からー (小泉 晋一)
5. おわりに (和井田 節子)

1. はじめに

和井田 節子・須田 和也

1.1 研究の目的と新入生歓迎球技祭の概容

本研究の目的は、初年次適応支援の役割を担う教育学部新入生歓迎球技祭（以下、球技祭と略）に参加した1年生の適応支援の成果と、実行委員会に所属する2年生有志への成長支援にかかわる教育的効果と課題とを整理・検討することである。そのために本研究では、2016年5月に行った球技祭を分析対象とする。

球技祭の目的は、新入生の適応支援である。クラスの仲間とスポーツ活動を通じて親睦を図ることを意図している。新入生全員参加として、授業がない5月第3土曜日の午前に行っている。施設の都合上、体育館と教室しか使えないという制限がある中で、①1年生同士が仲良くなり、②男女混合で、球技が得意でも不得意でも楽しめて、しかも③時間をもてあますことがないような種目・ルール・プログラムの企画と運営を任されるのは、球技祭実行委員会（以下、実行委員会と略）である。実行委員会は2年生の有志で組織し、前年度の12月に募集を開始する。実行委員長をはじめ中核となるメンバーは実行委員の中で互選される。4月からは新入生の中で互選された各クラスの役員と球技祭係とが実行委員会の会議に参加して補助的な役割を担い、委員会の決定事項を他の1年生に伝える。こうした球技祭の準備そのものが、1年生の適応を支援することになるとも

に、2年生の実行委員の学生は行事の企画運営、すなわちプロジェクトマネジメントについて学ぶ機会となる。

球技祭は、体育館での開会式の後、種目ごとに別れての対戦、表彰式、閉会式、集合写真撮影という流れで行われている。種目は、その年の実行委員会が考える。2016年は、体育館ではソフトバレーボールとドッジビーが、教室では卓球と羽根つきが、1年生3クラスによるクラスマッチの形式で行われた。前述の①～③の条件に沿ったルールやプログラムの工夫に、実行委員会はさらに知恵を絞るのである。

実行委員募集をはたらきかけ、その後の活動をサポートするのは、本学の学生生活に関わる教職員組織である学生厚生委員会に属する筆者ら6名の担当教員である。1年生に対しては、前期の「体育実技」を担当する須田が授業の中で球技祭種目を球技祭のルールで練習させた。また、「初等体育」を担当する小川は授業の中で将来教職に就く者として球技祭の意味を考えさせたりするなど、授業に球技祭を関連づけて支援した。また、後期の「保健体育理論」（担当：須田）でも、球技祭の経験を扱うことで球技祭の学びを深め、生涯スポーツとしての体育について考えさせるようにした。2年生の実行委員会に対しては、PBL型演習（Project Based Learning）の手法を取り入れて、プロジェクトマネジメントの力をつけるように働きかけた。

PBL型演習とは、学習者がプロジェクトに参加し、プロジェクトの成功に貢献する中で、実践を通して学習目的を再確認し、知識を運用し、他者と協同する能力を身につける手法である。齋藤（2016）は、先端ソフトウェア工学・国際研究センターのPBL教材洗練WGの報告をもとに通常の授業や教育手法とPBLとの違いを以下のように整理している。(1) 課題の解決を目的とする。(2) チームの力によって課題を解決する。(3) 受講者の自主性・自律性を重んじる。

実行委員会は、(2) 委員会内の組織で協力して①～③の課題を解決し、(1) 球技祭を成功させることを目的としている。そのため、担当教員は(3) 実行委員会の自律性を尊重することを心がけた。しかし、プロジェクトマネジメントの経験がない学生たちが大半であるためにそのリテラシーを学ばせる必要もあり、教員間の打ち合わせで進捗状況を確認しながら、必要に応じてやり方を教え、実行委員会をサポートした。

1.2 球技祭実施に至る経緯

本学教育学部の球技祭は、2014年より開催している。これは、教育学部3期生（2013年入学生）では不適応学生の数が2期生（2012年入学生）よりも増加したことから、予防的に適応支援を行う必要性が生じたことが発端となっている。

1期生と2期生は、入学した年の5月に適応支援を目的とした1泊2日の合宿研修を行っていた。しかし、3期生から合宿が廃止された。廃止された理由は、この年から教育

学部の入学生が130人の定員を満たすようになり、学生数が2期生の1.5倍となり、合宿の運営が困難であると判断されたためであった。そのために、アドバイザー制度を導入して教員が手厚く面倒を見たのだが、3期生の不適応学生は増加し、3期生の4年間を通じた退学率は5.3%と、2期生(2.3%)の約2倍となったのである(2016年11月現在)。

日本中退予防研究所によると、日本の私立大学の平均中退率は2.9%であるという(『中退白書』、2010)。その倍近くの退学率に危機感を抱いた筆者ら教育学部学生厚生委員会のメンバーは、4期生の新入生を対象とする、適応支援を目的とした、合宿に代わる行事を検討した。それと同時期に、学生による球技祭を行う希望を持っている3期生の学生が数人いることが判明した。筆者らは3期生の有志に、球技祭実行委員会の立ち上げと企画運営を依頼し、学生厚生委員の教員がその支援を担当することにした。さらに、新入生に対しては、球技祭を体育の授業の一部に位置づけることにして、全員の参加を促したのである。

翌年以降も130人程度の学生が入学してきたが、球技祭を継続する中で4期生は4.4%、5期生は0.8%と退学率は減少していったのである。また、2年生有志による球技祭実行委員会の活動は、2年生にプロジェクトマネジメントの力をつける機会となり、2年生にとっても教育的に意義ある活動になっていることがわかってきた。

1.3 研究方法

本研究では、2016年5月21日に行われた球技祭の教育的成果と課題を、球技祭準備の記録および事後に行った質問紙調査をもとに検討考察する。

第2章は、2年生約20名の有志からなる球技祭実行委員の成長支援に関する考察である。週1度行っていた筆者ら担当教員による打ち合わせ(教員打ち合わせ)の記録(2016年4月14・21・30日、5月12・19日の記録)をもとに、第2章においては2年生有志の球技祭実行委員会に行事をマネジメントする技術を伝えつつ行った教員による支援内容の整理と考察を試みた。またその効果については、2か月後に、自由記述による質問紙調査を行い、検討した。時間をおいて質問紙調査を実施した理由は、球技祭を冷静に振り返ることができて、学んだことの定着や転移もみることが出来る時期と考えたからである。

第3と4章は、球技祭の教育的効果について、新入生への適応および成長支援の観点から検討考察したものである。第3章では、1年生の球技祭での経験が大学生活に与えている影響を、5か月後にとった質問紙調査から検討した。また、適応援助の効果に関しては、球技祭の2か月後に質問紙調査を行い、分析を試みた。

2. 球技祭の企画・運営への支援に関する実践報告

須田和也・小川拓

第2章では、主に2年生有志による実行委員会への成長支援を中心に、教員側からの具体的な働きかけについて記述する。そして、第4節(2.4)において、実行委員へのアンケート調査を検討し、その効果を考察する。

2.1 2年生実行委員会への成長支援

実行委員会に対して計画的な運営支援が行われた。球技祭は毎年5月の第3週の土曜日に行われている。十分な準備工程を必要とするが、適応支援を目的としているため、不適応が顕在化しやすい5月の時期において毎年開催している。2016年度の実行委員会は2015年12月から種目等を決めてきた。4月13日に1年生の担当学生8人を加えて新たに立ち上げられ、球技祭当日まで38日間(土日を除くと実質26日)が準備期間であった。表2.1に実行委員38名の係と、6名の支援担当教員の役割分担を示す。係の枠組みは担当教員が決定したものである。

表2.1 実行委員の係と支援担当教員

係	学 生	支援担当教員
実行委員長	2年生1名	須田
副実行委員長	2年生2名	須田
練習用具貸出	1年生8名	教員A
表彰	2年生3名	和井田
用具管理	2年生4名	和井田
しおり	2年生3名	教員B・教員C・和井田
記録	2年生4名	教員A
救護	2年生5名	和井田
開会式・閉会式	2年生3名	小川
ソフトバレーボール	2年生6名	小泉
ドッジビー	2年生6名	小川
卓球	2年生6名	和井田
羽根つき	2年生5名	教員B・教員C

(係の重複担当あり)

また、表2.2に実行委員会の工程表を示す。限られた日程では、確実な作業内容の決定と実行委員会の運営が必要のため、統括担当教員の須田が工程表を作成し、4月の実行委員会立ち上げの日に全員へ配布・説明を行った。係の枠組みと準備工程を教員から示したのは、プロジェクトマネジメントを学ぶことを意図したためである。工程表配布以後は、工程表に従って実行委員長が主導的に作業を進めていった。

実行委員のスタッフ会議は計9回(火曜日と金曜日の昼休みに)行われた(火曜日は担当教員もオブザーバーとして参加)。この会議は主に各係の準備進捗状況の確認、次の会議までの作業内容の確認、担当教員からの助言などである。また、準備期間中は担当教員6名の教員打ち合わせ(週1回、放課後の約90分)を計6回実施した。教員打ち合わせでは、実行委員会の進捗状況、作業の漏れ落とし、急を要する支援内容の有無の確認とその支援内容の検討が行われた。さらに、各係の個々の学生名をあげ、その学生の状況に応じた支援方法の検討もした。また、携帯端末によるSNS(LINE)で実行委員と担当教員がより早く正確に一斉に情報共有できるようにした。以上のように実行委員会組織と下

表 2.2 新入生歓迎球技祭工程表 (学生に配布したものに時期区分を加えた)

期	月	日	曜	実行委員会	内 容	体育実技 (須田)			担当教員
						クラス1	クラス2	クラス3	
第1期		13	水	12:25 スタッフ会議	この日程表の説明		授業		
		14	木			授業			18:00 教員打ち合わせ
		15	金	12:25 スタッフ会議				授業	
		16	土						
		17	日						
		18	月						
		19	火	12:25 スタッフ会議	委員長、競技係 しおり係と須田にルールを 「印刷して」渡す 完了				
第2期	4月	20	水				授業		
		21	木			チーム編成			18:00 教員打ち合わせ
		22	金	12:25 スタッフ会議				チーム編成	
		23	土						
		24	日						
		25	月						
		26	火	12:25 スタッフ会議					
第3期		27	水		しおり係 チーム編成表を須田から受け取る		チーム編成		
		28	木			授業			18:00 教員打ち合わせ
		29	金	12:25 スタッフ会議				授業	
		30	土						
		1	日						
		2	月						
		3	火	12:25 スタッフ会議					
第4期	5月	4	水				授業		
		5	木			授業×			
		6	金					授業×	
		7	土						
		8	日						
		9	月						
		10	火	12:25 スタッフ会議	しおり係 しおりの印刷を 完了 →須田に配布用しおりを渡す 完了				
第4期		11	水				しおり配布・練習①		
		12	木			しおり配布・練習①			18:00 教員打ち合わせ
		13	金					しおり配布・練習①	
		14	土						
		15	日						
		16	月						
		17	火	12:25 スタッフ会議					
		18	水					練習②	
		19	木				練習②		18:00 教員打ち合わせ
		20	金	16:15 最終準備				練習②	16:15 最終準備
		21	土	球技祭当日					

部組織（各係）、そして担当教員組織が密接にかかわりを持ちつつ球技祭の準備作業は進められた。

球技祭の準備は4期に分けることができる。以下に各期間の主要な工程を記載する。

第1期は実行委員長を中心に4つの種目係が各種目のルールの詳細を作成する期間であった（詳細は「2.2. 種目ルールの作成」を参照）。第2期は1年生の体育実技の授業において各種目のチーム編成表を作成することであった。実行委員長が体育の授業に来て、1年生に各種目ルールを説明し、1年生の要望を聞き、希望の調整をしてチーム編成を行った。第3期はしおりの作成と印刷を行い、それと並行して体育実技の授業で各種目の練習が行われた。第4期は体育実技の授業でしおりの配布とその説明が行われ、実施に向けた詳細が完成した時期である。

しおり作成係は、実行委員長をはじめとする各係および担当教員と密に連携を取りながらしおりを作成した（表2.3）。球技祭初年度より目次の構成は担当教員が指示し、具体的な内容は実行委員の学生が作成した。

表 2.3 新入生歓迎球技祭のしおり目次

ページ	記 載 内 容
1	教育学部球技祭の目的 / 実行委員長あいさつ / 学長あいさつ（教員代表）
2	施設案内図（種目会場図、更衣室、待機場所）
3	実行委員（2年生と1年生）の係と役員名
4	担当教員と支援する係 / 当日のバス時間表 / 当日の大まかなスケジュール
5-6	諸注意事項（集合時間、昼食と着替え、その他注意事項、当日の持参品、表彰規定と配点）
7-8	ドッジビー（種目ルール、審判、クラス別選手オーダー表、使用コート配置図、リーグ戦表、競技進行時間表）
9-10	ソフトバレーボール（記載内容はドッジビーとほぼ同様）
10-12	卓球（記載内容はドッジビーとほぼ同様）
12-14	羽根つき（記載内容はドッジビーとほぼ同様）

2.2 種目ルール作成

種目とそのルールは、2年生実行委員の種目係が1年生時の球技祭の経験をもとに、実行委員長や種目担当教員と相談しながら決定した。種目係のミーティングにおいては、それぞれの競技の正式なルールで勝敗を明確にすべきであるという意見も出された。種目係の指導においては、勝敗重視のチャンピオンスポーツは目的に反することを意識させ、球技祭の目的の実現に向けてのルール作成を意識させた。

ルールの改正の視点として第一に考慮しなければいけないことは、「学生の能力差」をどのように縮めるかということである。性差、生育環境や過去および現在の運動歴は多様である。ソフトバレーボールを例にすると、バレーボールを経験してきた学生は、能力を発揮して活躍したいと思う傾向が強い。しかし、このような学生とほとんど運動経験がない学生とでは、ボールを扱う技術も基本的な体力も大きく異なる。経験者の人数を均等に割り振り、チーム分けを行ったとしても、経験者の強烈なアタックが初心者に向かってい

き、初心者の学生がボールから逃げ回るような競技になっていては、親睦どころか劣等感さえ与えてしまう。時には大差の点数の勝ち負けも発生するであろうし、大きなけがや事故にもつながりかねない。結局はねらいから大きく逸れることになってしまうのである。以上のように身体能力の差を十分考慮したルールが必要となる。このような担当教員のアドバイスをもとに、学生たちは種目担当に分かれルール作成を進めていった。以下各種目のルール作成における動きや助言内容等を記載する。

2.2.1 ドッジビー

教育学部の学生は、1年生の人数が130名以上であることから、1試合で多くの人数が出場できる種目も運営上必要であった。その中で候補として挙げたのが「ドッジボール」であった。多くの学生が一度は行ったことのあるボール運動のため、運営も進行も容易だと考えられていた。しかし、話し合いを進める中で、親睦をねらいとした球技祭で、運動経験の違う20名同士のメンバーがボールを投げ合った場合、同等の楽しさと安全性が確保でき、しかも「ねらい」が達成できるのかという疑問も挙げた。

小学校学習指導要領（昭和33年10月1日施行、昭和46年4月施行、昭和55年4月施行、平成4年4月施行、平成14年4月施行）には、4年生以上に（平成4年4月施行からは3年生以上）、ドッジボールが登場することはない。現在施行中の小学校学習指導要領にはドッジボールの記述はなく、小学校学習指導要領体育編解説でも、例示の中で中学年以上にドッジボールの記載はない。ボール運動が得意な児童を中心にゲームが進行し、投捕球が苦手な児童は逃げるだけの運動になってしまう。投捕球力の差が出てくれば、さらに顕著になってくる。また、ドッジボールは、苦手な者や弱い者が狙われる。そこが作戦の一つになるのである。過度に弱い者を攻めるような作戦や指導は「いじめ」にもつながる恐れがある。小学校学習指導要領にドッジボールが入っていないこともうかがえる。このような学習指導要領の変遷と意味を2年生は1年次に受けた「初等体育」の授業で扱っていたこともあり、これらの知識を活用しながら実行委員会での話し合いは進んでいった。

結果的に「ドッジボール」から「ドッジビー（ディスクドッジボール）」に変更することになった。「ドッジビー」は、ボールの代わりに、ナイロンとウレタンでできているディスクを使う競技で、ドッジボールと異なり、あたっても痛くなく、恐怖心も起こりにくい。また力任せにディスクを投げると、ディスクが変形し思う所には投げることができず、正確に投げようとする速く投げることができない。ディスク自体が投げにくいことから、かなりのイレギュラーが発生するという特徴がある。

ルールの改正としては、イレギュラーが多く発生することから、落下したディスクを拾った選手は必ず、自分で投げなければいけないルールとした。また、外野同士、内野外野同士のパス回しも回数制限を設けて、上手な学生に回りにくくした。

さらに、2年生の主審1人をセンターライン上に、線審4人をコートコーナーに配置し、判定が曖昧になりがちなラインクロス判定を厳しく行うこととした。不公平感を無くすことを意図したのもである。この2年生審判の配置は教育学部学生への指導的効果を目指したのもである。審判技能の獲得は小学校の教員には必要であり、判定の正誤により児童との信頼関係を崩してしまう事例も少なくないからである。

2.2.2 ソフトバレーボール

ソフトバレーボールは1年生の必修科目である「体育実技」において実施しており、全ての1年生は経験がある。ボールは柔らかいソフトバレーボール専用球を使用するため、バレーボールと異なりレシーブ等で感じる痛みが少なく、ボール運動が苦手な学生にも抵抗感が少ない。

特別ルールとして、バレーボール経験者に、得意な利き手でのアタックを禁止とするような配慮も行った。既定の位置から相手コートにサーブを打ち込むことができない学生もいることを考慮し、好きな場所から両手で投げ入れることも可能とした。公式ルールでは1回の攻撃でボールに触れられる回数は3回であるが、これを4回までとし、ゲーム中のラリーが長く続くようにした。ラリーが続くことはネット型競技の醍醐味であり、チーム内の一体感や盛り上がりも増してくる。それが親睦というねらいに近づくと考えたのだ。学生の知恵の詰まった、ねらいに近づくルール改正であった。

球技祭終了時刻が決まっているため、運営上の配慮として「時間優先」とした。基本的には15点先取で勝ちとするが、25分経過したらその時点での得点が多い方を勝ちとすることにした。制限された時間の中で、不公平感を出さないように行うことを考慮した結果であった。

2.2.3 卓球

卓球は上級者と初級者の技術レベルの差を縮めるために、係はラケットの変更を考えた。卓球用のラケットの代わりに、ペットボトルや下敷き等、様々な案が出されたが、最終的にスリッパが最適であるという結論に至った。第一にゴムのラバーがついていないために、ボールに回転をかけて進行方向を変化させることや、相手のラケットに当てて角度変化を起こすことが難しくなる。このことは上級者と初級者の技術レベルの差を、ある程度解消することが期待できた。さらに初心者においては卓球用ラケットの使用を可として、上級者と対等に対戦できるような配慮をした。また、手にはめたり、卓球のラケットと同じようにも持ったりすることもできるスリッパには、扱い方の工夫もできるという利点があった。

卓球運営上の一番の懸案事項は、体育館から教室まで卓球台を運ばなければならないということであった。施設の事情から、体育館で卓球を行うことが難しかったのである。卓球台は一台でも相当の重量があり、運ぶことにはかなりの労力と危険がともなう。結局、

教室にあるテーブルを6台並べて簡易卓球台を作ることになった。設置した机と机の間には多少の段差ができるが、その段差で生じたイレギュラーバウンドが突発性の面白みを試合に与えるということになり、採用された。時間的についても、ソフトバレーボールと同じように1セット10点先取で時間制限を設け、時間内に終わらなかった場合には、その終了時間での点数で勝敗を決めることにした。

2.2.4 羽根つき

本学所在地の埼玉県春日部市には、伝統工芸品の一つとして羽子板がある。そこで、羽根つきを球技祭の種目として導入した。地域の伝統文化等を理解し大切に思う心を育てていくことは、学校教育においては重要な取り組みである。教育学部に在籍する埼玉県春日部市出身の学生は全体の約15%である。他の85%の学生に春日部市の文化・歴史等の理解と認識を深めることも重要な取り組みである。以上のような観点から、羽根つきは、恒例種目として位置付け実施している。

本来の羽根つきは、一般的なラケット競技と同様に、相手が打ち返すことができない場合に得点となる。しかし、本球技祭では、親睦を深められるように、2人組で交互に羽を打ち合い、連続ポイントで競うことにした。これは小学校の現場においては、バレーボールやプレルボールなどの導入時によく行う指導法である。ペアで何回ラリーが続くかを競わせ面白味を与え、ペアをチームとして、連続ポイントの点数制で他のチームと争いながら打ち合う経験を学ばせるのである。

一般的に、運動が得意な学生は、球技祭のような企画に積極的・意欲的に参加する傾向がある。そのため参加の動機づけにはあまり労力は要しないものである。一方、運動が苦手な学生は、球技祭参加に消極的な傾向があり、スポーツ活動自体がその学生のコンプレックスとなっていることも少なくない。本学球技祭は学生同士の親睦を深め、適応支援を図ることを目的としている。このような企画の場合は、本来のスポーツ活動の持つ面白さ、つまり競い合うという元来の競技性を基盤とする正規のルールをベースにしながらも、運動が苦手な学生にも配慮した独自のルールを作成することが重要である。

2.3 開会式と閉会式の運営

小学校や中学校の行事において、開会式や閉会式は大切にされている。規律ある態度で「はじめ」と「おわり」を作りあげることが行事全体を引き締める。そこで、開会式や閉会式の運営を、教員になったときの集団指導のコツを学びとる場に位置づけた。

担当教員は、会を進行する担当者や発表者に失敗経験をさせないようにすることに配慮した。大勢の前で恥をかくことで自信を失い、消極的になることを危惧したためである。教員になった時にここを失敗すると、児童との信頼関係を損ない、その後の学級運営に悪影響を及ぼす危険性もある。担当教員はこれらのことを体験的に学べるように支援した。

前述した開会式や閉会式における配慮事項を意識させ、具現化するための課題として取り組ませたのが「式次第の作成」であった。そして、明確に開会式や閉会式の担当を割り振らせた。球技祭のしおりに開会式、閉会式の式次第を掲載する必要性を説明し、開会の言葉や挨拶をする教員や学生をその場の雰囲気で決めるのではなく、担当者を割り振り掲載するようにアドバイスした。

開会の言葉や挨拶をあらかじめ該当の教員や学生に依頼し承諾を得ておくこと、それらに要する時間を決めて計画的に準備することなども、球技祭を成功させるためには大事な要素である。挨拶の担当を決め、承諾を得るだけであれば、依頼された教員や学生は自分の感覚で話す時間を決めてしまい、全体の進行に影響を及ぼすことになる。「30秒」「3分」「5分」等、時間を指定することで運営側は全体時間の把握ができる。

また、学校行事の運営では参加者の動きを把握することが不可欠であることから、開会前から終了後の人の流れや配慮事項を意識させながら、2年生実行委員会に対して以下のような支援も行っていった。

2.3.1 開会式前に行う動線確認

1、2年生、及び教職員合わせて200人ほどの大人数を集散させる場合、事前に考えておかなければならないのが、人の動きや流れを示した「動線」である。様々な行事の運営においては必須事項である。運営責任者、開閉会式の係が綿密に学生全体の動きを把握して、式の流れを作らなければならない。また、災害等が発生した際の人の流れも想定しなければ安全確保もできない。そのためには、着替え場所、入場口、靴の保管場所、出席確認、貴重品管理、荷物置き場、整列場所、待機場所、応援エリア、実行委員控室、対戦表や案内図、注意事項の掲示場所、ゴミ処理など様々な要素を考慮しながら動線の確認を行った。以上のような動線確認は大事なことにもかかわらず、行事運営の経験が少ない学生は意外と気づかないことである。学校現場のみならず、一般企業においても役に立ち、学生に経験・理解させる有意義なスキルである。

2.3.2 開閉会式予行練習

開閉会式は、前述の式次第作成、動線確認を経て、司会進行役、学生挨拶、その他スタッフを集めて、当日の本番を意識させ予行練習を行った。各自、自分の役割について十分練習を行うようアドバイスをしていたが、いざやってみると、学生たちは、話す内容が不明確であったり、時間の超過あるいは不足が生じたりと、進行がうまくいかないことを実感したようだった。

担当教員からのアドバイスの別の例として「予令」と「動令」の区別を明確に意識させることがあげられる。号令には「予令」「動令」があり、「前へならえ」の号令は正確に言うとして「前へ（予令）」（間）「ならえ（動令）」である。号令をかける者がそれらを知らないと、一つ一つの動きが揃わず、緊張感が欠けてしまう。これと合わせて、学生が知らない

号令としては、椅子がない場所では「座る」ではなく「腰を下ろす」が適切であることが挙げられる。椅子がない場所で「座る」は「正座」を意味しているのである。号令をかける者は、場の状況等を考慮しながら、「座る（正座）」「腰を下ろす」「しゃがむ」を使い分けなければならないことなどを教えた。担当教員として、「やりなおし!」、「合格!」の評価を与えつつ、繰り返し開閉会式の予行練習を行った。

2.3.3 閉会式における1年生の感想発表

閉会式では1年生の感想発表の時間を設けた。発表者は事前に決めず、インタビュアーの実行委員が、その場で指名・発表を行うように助言した。事前に発表者を指名しておくのであれば、発表者以外は深い振り返りをしなくなってしまうことがある。誰が感想の発表者に指名されるかが不明確な状況を作ることにより、1年生の参加者135人全員が、球技祭を振り返る機会となることができる。実際の閉会式では、表彰式の後、ひと時の静寂の時間を設け、1年生一人ひとりが球技祭を振り返る時間を共有することができた。教育現場でも児童生徒を集中させたり、考えさせたりするときにも活用できるので、教育学部の学生は知っておくべき有効な方法を伝えたのである。

2.4 球技祭運営経験により期待される効果（実行委員へのアンケート結果から）

実行委員は、自分の役割を把握し、協力しながら、球技の能力差がある多くの学生が親睦を図り、楽しんで参加できる球技祭の企画という困難な課題に、真剣に取り組んだと思われる。今後学生が教員となった際には、学級の児童生徒の能力差に悩むことになる。どの授業もユニバーサルデザイン化を図りながら、授業を行うことが求められる。クラスの児童生徒の実態を捉え、どの児童生徒にも有益な授業を行っていく必要に迫られる。時には教材の与え方を工夫したり、今回の球技祭のようにルールを変更したりすることは、教員として今後必要不可欠なスキルである。実行委員の2年生にとって本学球技祭が、それらのスキルを学ぶ場になったのかをアンケート結果から検討する。

実行委員の2年生には2か月後の7月に、「自分自身の学び」(学)、「小学校の教師をめざす上で役だったこと」(教)、「実行委員をして良かったことなどの感想」(感)を自由記述で回答を求めた。感想については「1年生との触れ合う機会になったと思います。1年生もすごく楽しんでくれてよかったです」、「1年生が楽しかったと最後言ってくれたので、達成感ややりがいを強く感じることができました」、「完成した時の達成感。行事のひとつを任されてやり遂げられて嬉しかった楽しかったです」などの「1年生との交流」や「達成感」に関する記述が大半を占めた。

以下に「自分自身の学び」(学)、「小学校の教師をめざす上で役だったこと」(教)の記述文章を概観・整理して、グルーピングを試みた。グループごとの主な内容を記述すると、以下のように整理できる。

①集団の中での自分の立場や役割の理解

「周りと協力して物事を成功させる方法と、独りよがりでは達成できないことを学べた」(教)、「多くの人数がいる中でひとつの目標達成するために自分がどのように動くべきなのか、とても考えた。これは現場でも必要だと思う」(教)、「危険な言動に気づき、注意する力が身につきました」(教)

②思いやりの気持ち、相互の尊重、役割分担と責任、協力の姿勢の重要性の理解

「私は互いを尊重することについてまなべたと思います。やはり、各リーダーや代表をサポートし、よりよいものをつくる時は互いを尊重する心が必要だと思いました」(学)、「自分1人でなんでもするのではなく、適材適所に仕事分担し、それぞれが責任をもってこなす」(学)、「何かを企画し、運営する力を学ぶことができました。また1人の力で行おうとすると失敗するということを学びました」(学)、「大きい企画を立てるときには、リーダーがとても大切だと気づいた。またリーダーだけでなく、その他の人間が協力していかないと、運動会などは成り立たないのではないかと思った」(教)、「球技祭を成功させる為の団体連携力」(教)

③ニーズに応じた企画、目的の明確化の力

「2年生は、卓球班やソフトバレー班などに分かれて、それぞれのルールづくりなどの企画をしたので、企画力などが身に付いたと思います。また、その時に対応した態度や、みんなで力を合わせてなんとか何かを成し遂げる力も身に付いたと思います」(学)、「誰もが楽しめるようなルールの工夫と伝わりやすい文章の書き方」(教)、「発達段階(相手)によって出す指示の質や量を変える必要がある」(教)、「ひとつの行事を作り上げる力がついた。しおりなど、行う側のことを考えて作り上げる力」(学)、「相手(1年生)のことを考えながらルールを決めたりする力がついたと思う。相手の意見を取り入れながら自分の意見も言う」(学)

④判断力、決断力、行動力、実行力の獲得

「自分が今できることは何かを把握して行動する状況把握(する力)が身につけられたのではないかと思う」(学)、「年齢は異なっても、大人数もしくは少人数の1年生をまとめる際のまとめ方を自分なりに考え、実践できるきっかけになった」(教)

⑤コミュニケーション力の向上

「自分の意見を発表する力が身についたと思います」(学)

⑥計画的な作業工程の重要性の理解

「企画を立てることの難しさと、時間がとても必要だと気づきこれを達成するためには実行委員が協力して企画を進めていかないといけないということを学びました」(学)、「『準備8割、当日2割』。準備が大切だということ」(学)

⑦教師としてのスキルの獲得

「審判員の経験。ドッジボールは(小学校で)必ず行うので、どのように進めたらよいか。」(教)、「ルールの決め方など」(教)、「1年生に指示するなどの気配り」(教)

⑧リーダーシップの向上

「リーダーシップ、他人のことを考えて行動する力」(教)、「大人数を統率する力が身についたと思います」(教)、「ひとを統率すること」(教)

自由記述をまとめると、1) 集団の中での自分の役割(リーダーとメンバー)を認識し、相互の尊重や思いやりの気持ちを持ちつつ、相手やニーズに応じた企画や運営することの大切さ 2) 適切な判断や決断をして行動・実行すること、それを実現するためには、3) 周到な準備と計画が必要であること等を学んでいることが推察できた。これらの要素はプロジェクトマネジメントの要素でもあり、2年生の実行委員経験はこの観点において十分な成果があったといえる。

3. 球技祭での経験とその意義および効果の広がりについて

須田和也

3.1 調査の目的

球技祭は前期に終了したが、その効果の定着を測ることを目的として、1年生を対象に、後期必修の「保健体育理論」の授業において質問紙調査を行ったその内容は、球技祭での経験内容とその意義、そして意義の内容あるいは役に立っていることである。

3.2 方法

3.2.1 調査対象

1年生の後期必修科目である「保健体育理論」を履修した学生を対象とした。調査日は、10月上旬である。球技祭から約半年後にも学びが定着しているかどうかを確認するとともに、「保健体育理論」で球技祭の学びを検討させる意図から調査を行った。欠席者を除く114人の回答が得られた。未記入欄のある回答は分析の対象からは除外し、一部未記入であっても分析に影響がない1人分の回答を加えた96人分(84.2%、男性53人、女性43人)を分析対象とした。

3.2.2 調査内容

本稿4「アンケート結果からみる球技祭の心理学的効果」で使用した質問紙の中の質問項目「球技祭に対する自由記述」で得た42人の回答から頻出する語を抽出したところ、以下の7項目に分けることができた。すなわち、1「集団の運営に関わる」、2「他の学生のことを考えて行動する」、3「交友関係が広がる」、4「クラスメートと協力する」、5「団結力を高める」、6「指導にあたった上級生と交流する」、7「スポーツを楽しむ」の7項

目である。

そこでこの7項目を用いて、新たに質問紙を作成した。第一に、それぞれの項目についての経験の程度を4段階（ほとんど経験していない～非常によく経験した）で聞いた。同様にその意義の程度を4段階（ほとんど意義がない～かなり意義がある）で聞いた。第二に、前述の7項目のうち「意義を認めている」と回答した項目のうち2項目を任意に選択させて、「意義の内容、あるいは役に立っていること」について自由記述で回答を求めた。

3.3 結果と考察

3.3.1 球技祭で経験したこと

図3.1に「球技祭での経験とその程度」を示した。経験の程度の4段階のうち、3と4を選択した学生を「高経験者」とした。前述の7項目のうち、高経験者の割合が高い項目は、「クラスメートと交流する」(78.1%)、「交友関係が広がる」(77.1%)、「団結力を高める」(75.0%)、「他の学生のことを考えて行動する」(65.6%)であり、仲間づくりへの積極的な姿勢に関する項目が上位を占めた。球技祭の目的が新入生の適応支援であることから、仲間づくりを促進できたのは成果の一つとして挙げることができる。

一方、高経験者の割合が低かった項目は「集団の運営にかかわる」(26.0%)、「指導にあたった上級生と交流する」(38.5%)の2項目であった。しかし、1年生のための球技祭であるから運営自体にかかわった1年生が少ないのは当然

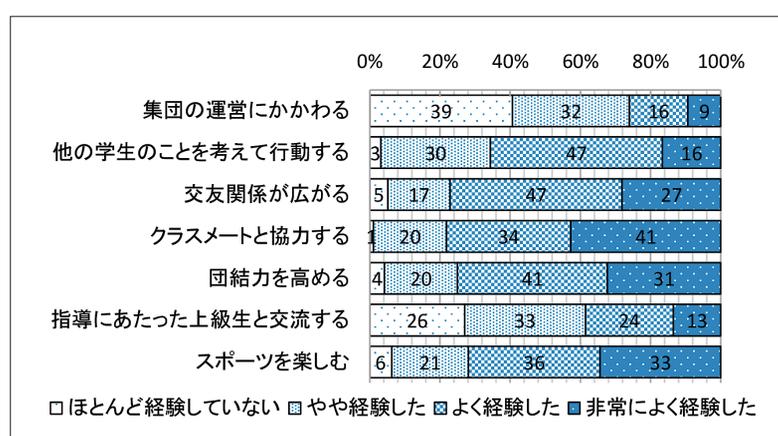


図3.1 球技祭での経験とその程度

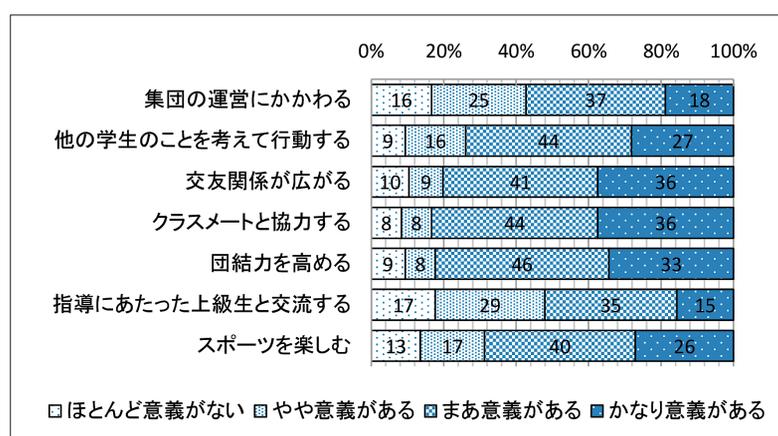


図3.2 球技祭で経験したことの意義の程度

のことである。また、半年後も約1/4の学生が、運営に参加しながら上級生とともに主体的に行動していたという印象をもっていたと考えられる。実際、例年、球技祭実行委員会の参加希望者は多い。これらの質問紙調査の結果を参考に考察すると、1年次に球技祭で上級生とかかわりながら球技祭に積極的に参加した学生たちが、2年生になったときに球技祭実行委員に立候補することがうかがえるのである。

3.3.2 球技祭で経験したことの意義の程度

図3.2に「球技祭で経験したことの意義の程度」を示した。7つの項目の意義について、4「かなり意義がある」と回答したものに着目して順位をみると、「交友関係が広がる」「クラスメートと協力する」がともに37.5%、「団結力を高める」が34.4%とこれらの項目において意義を認める傾向がみられた。3.3.1の球技祭で経験した程度とは順序が異なるものの、クラスメートとの関わりに関する項目が上位を占めていることは同じ結果であった。低かった項目は「集団の運営にかかわる」(18.8%)、「指導にあたった上級生と交流する」(15.6%)であった。これらも3.3.1にみられた経験の程度において、経験の程度が低かった項目と一致する結果であった。以上のことから、経験の程度と意義の感じ方には同じ傾向があることが伺える。意義の認知には経験が必要であることの確認ができる結果であった。

3.3.3 球技祭で経験したことの意義の内容、役に立っていること

7項目のうち、意義を認めた2項目を選択させて「どのような意義があるのか、あるいは役に立っていること」について自由記述で回答を求め、全部で162の回答を得た。自由記述を書く項目として学生が選んだ項目の内訳は「集団の運営にかかわる」10(6.2%)、「他の学生のことを考えて行動する」14(8.6%)、「交友関係が広がる」51(31.5%)、「クラスメートと協力する」39(24.1%)、「団結力を高める」18(11.1%)、「指導にあたった上級生と交流する」15(9.3%)、「スポーツを楽しむ」15(9.3%)であった。選択された項目の上位3項目は、順位は異なるものの3.3.1の経験した項目と3.3.2の意義を認めた項目の上位3項目と同じであった。以下に、これらの項目について自由記述の内容について検討する。

3.3.3.1 「交友関係が広がる」の意義の内容、役に立っていること

自由記述による回答の「球技祭を通じてまだ話したことのない人と話さなければいけない状況になり、そこから友達になった人が多かった」、「話したことなかった人たちと話すことができた」、「自分のクラスだけじゃなくて、他のクラス(の人)ともよく会話するようになった」にみられるように、回答の多くが新たな友人作りのきっかけとなったというものであった。

さらに「交友関係が広がったため、授業でグループ学習をするときに話が進みやすくなった」、「交友関係を広げることは、今のクラスじゃあなくなった時や、2クラス編成の

時に友達が増えることにつながるから」の記述からは、球技祭で広げることができた友人関係が他の授業へ波及する効果があり、将来的にもその効果を期待していることが認められる。

また、「球技祭で仲良くなった友人と勉強を教えあえるようになった」、「悩みや相談ごとなどを話せる人が出来た」などの記述からは、友人関係の深まりの手助けにもなっていることが伺える。

以上のように、交友関係の広がりや意義は、新しい友人を作ること、授業などの学生生活へ波及する効果、既にある友人関係の深まりを意味していると考えられる。

3.3.3.2 「クラスメートと協力する」の意義の内容、役に立っていること

自由記述による回答の「グループ活動などで意見を出したり聞いたりなどするところで役に立っていると思う」、「アクティビティ（基礎演習）などでのグループワークの時に役に立っている」、「模擬授業を行うときに協力して話し合いながら考えたこと」、「チームスポーツで戦うので、クラスメートとの協力が必要で、これからの大学生活にもつながる」、「クラスメートと協力することで、これからの行事などで協力することができると思うこと」などの回答からは 3.3.3.1 と同様に、友人関係が他の授業へ波及する効果があり、将来的にもその効果を期待していることが伺える。これらの記述は全 39 回答のうち 16 回答（41.0%）、約 4 を占めている。球技祭はクラス対抗形式であるため、クラスやチーム内の相互の協力やサポート、それを具体化するためのコミュニケーションの場となっている。それらの経験の効果として、この結果は見ることができる

3.3.3.3 「団結力が高まる」の意義の内容、役に立っていること

質問項目「団結力が高まった」ことの意義については、「団結力が高まりクラスの仲がより深まった」、「団結力を高めることで、今後も団結して物事に挑むことができるから」、「困ったときに頼れる人ができた」などが見られたが、多くは「交友関係の広がり」や「協力の意義」と類似した記述となっていた。

3.3.4 球技祭に対する積極性と意義の関係

「次年度も球技祭があったら、参加したいですか？」の質問に対して、回答があった 95 人のうち、「参加したくない」と「どちらともいえない」を選択した学生は「消極群」とし、「参加したい」を選択した学生は「積極群」とした。消極群が 51 人で、積極群が 44 人であった。それぞれの群の経験に対する意義の程度を図 3.3 と図 3.4 に示した。

図 3.3 より、積極群の学生においては、ほぼ全員が 7 項目全てに対して意義を認めており、「ほとんど意義がない」と回答した学生数は、7 項目の平均でわずかに 1.0 人（2.3%）であった。一方、消極群の学生においても、7 項目を平均すると 10.7 人（21.0%）の学生が全ての項目で「ほとんど意義がない」と回答した（図 3.4）。2 群を比較すると、消極群は球技祭の経験に意義を見出すことができない学生が積極群よりも多い。しかし、消極

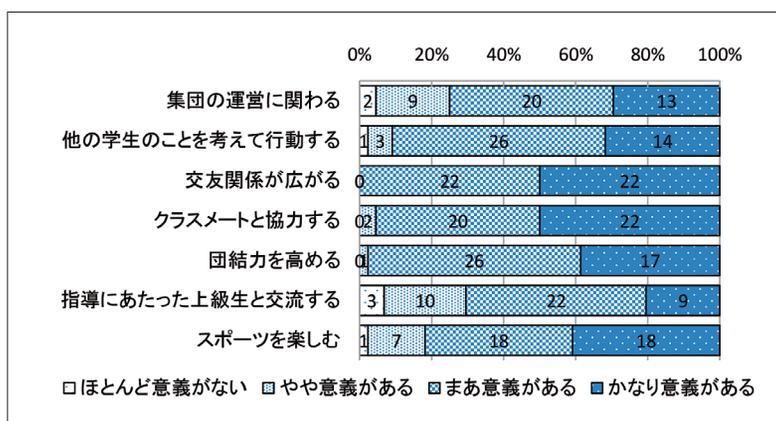


図 3.3 積極群の球技祭で経験したことの意義の程度

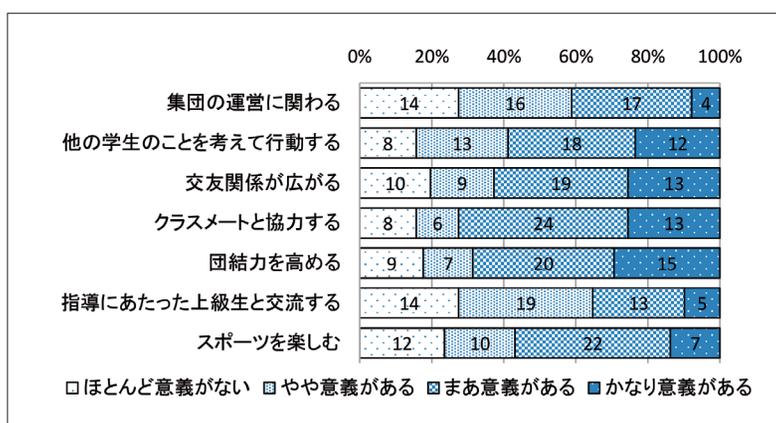


図 3.4 消極群の球技祭で経験したことの意義の程度

群であっても、40.3人（79.0%）の学生が球技祭に何らかの意義を感じていたといえる。つまり、やりたくはないと思っている学生でも、大半は球技祭の意義を認めていることを示す結果であった。

球技祭に対する積極性には、開催される競技種目、運動やスポーツの経験値、集団行動の得意不得意など多くの要因が考えられる。教育現場においては得手不得手があっても教育上必要な職務は遂行しなければならない。学生の適応支援を目的として行われている球技祭ではあるが、スポーツ活動という小学校現場においては必須の教育的活動に対する教員資質の礎を作る一助にもなっていると思われる。

4. アンケートの結果からみる球技祭の心理学的効果 —量的分析から—

小 泉 晋 一

4.1 問題

新入生に対してフレッシュマンキャンプなどの学外宿泊研修を行う大学は少なくない。宿泊後のアンケートの分析などをとおして、その効果を検証した研究も行われている。例えば佐久田・奥田・川上・坂田（2008）は、1泊2日の宿泊による新入生オリエンテー

ションを行い、アンケートの結果を因子分析した。その結果、9つの因子が抽出され、その中の「居心地の良さ」の因子は交友関係の満足感を促進し、「帰属感高揚」の因子は大学に対するフィット感と学業満足感を高めることを示した。古田・中村・香月・加藤・田中・西河・福島・堀・向井・八城（2012）は、自由記述による新入生オリエンテーションの感想をテキストマイニングによって分析した。そして、オリエンテーションが学外の宿泊をとまなうものであっても、一日のみの学内実施であっても、オリエンテーションの形式に関係なく、学生たちは一貫して学生同士が知り合いになれることを肯定的に評価していた。さらに新入生の大学適応を円滑にするためには、対人関係面での適応を促すようなプログラムを用意することが重要であることを示した。黒澤（2006）は4泊5日にもわたるキャンプを新入生に実施して、一連のプログラム終了後には情動知能尺度の得点が増加することを報告した。これらの結果は、いずれも新入生に対する宿泊型のオリエンテーションが友人関係の形成や対人的スキルの習得に有効であり、新入生の大学適応を促進する効果があることを示している。

本学では宿泊によるキャンプを行う代わりに、半日間の球技祭を行っている。球技祭を実施した学年は、実施していない学年よりも大学適応が良いという印象はあるのだが、球技祭の効果を主観的な印象論で論じることは慎まなければならない。重要なのは球技祭の効果を測定して、客観的に把握していくことである。そうすることによって初めて、新入生の適応支援としての球技祭の意義と有効性についてのエビデンスを示すことができるようになる。本章は球技祭の効果測定的一端として、球技祭後のアンケートの分析を試みる。

4.2 方法

4.2.1 調査対象

共栄大学教育学部の新入生に対して球技祭後に質問紙を実施した。実施した時期は球技祭から約2か月後の7月である。2か月前に行った球技祭を振り返ったうえで質問項目に記入を求めた。球技祭の全部で128人（男性76人、女性52人）から回答を得たのだが、記入漏れなどの不備のある回答は分析の対象から除外した。したがって最終的には119人分（男性71人、女性48人）の回答を得た。

4.2.2 調査内容

球技祭の参加者には球技祭に対する自由記述による感想のほかに、20の質問項目を用意してそれを5件法（1「まったく当てはまらない」～5「よく当てはまる」）で評定するように求めた。質問項目の内容は、「友人関係が広がった」「大学に対する所属意識が強くなった」などの球技祭後に感じた事柄を問うものである。これらの項目は、昨年の球技祭で得られた参加者の感想や佐久田他（2008）が使用した「新入生オリエンテーション成果尺度」などを参考にして作成した。

4.3 結果

4.3.1 項目ごとの全体の平均値および男女別の平均値

表4-1には、各項目の全体の平均値と標準偏差および男女別の平均値と標準偏差とをそれぞれ示した。さらに、項目ごとに男性と女性との平均値差の検定 (t 検定) を行い、その結果である t 値と Cohen の d の値を示した。それぞれの項目を検討してみると、項目1「友人関係が広がった」、項目7「みんなと打ち解けることができた」、項目8「気の合う人と出会えた」、項目11「同級生の新しい一面を知ることができた」、項目13「大学生活が楽しくなった」、項目14「このような行事をもっと開催してほしい」、項目16「みんなとうまくやれた」の7項目は、いずれも全体の平均値が4.00を超えている。これらを総合的に判断すれば、本球技祭が新入生の友人関係を形成するのに役立ち、概ね好評であったと考えられる。

表4-1 各項目の全体の平均値および性別ごとの平均値と、 t 検定の結果

項目内容	全体(N=119)	男性(N=71)	女性(N=48)	t 値	d
Q01 友人関係が広がった	4.35(.70)	4.34(.76)	4.38(.61)	-.28	.06
Q02 自分の好きなことができた	3.42(1.19)	3.28(1.24)	3.63(1.08)	-1.55	.30
Q03 大学の雰囲気に馴染むことができた	3.93(.89)	3.87(.91)	4.02(.86)	-.89	.17
Q04 時間をもてあまして困った	2.82(1.18)	2.99(1.23)	2.58(1.09)	1.84	.35
Q05 大学生活に対する不安が和らいだ	3.59(1.03)	3.54(1.00)	3.67(1.08)	-.68	.13
Q06 上級生に対して親しみがもてた	3.45(1.12)	3.20(1.09)	3.81(1.07)	-3.05	** .57
Q07 みんなと打ち解けることができた	4.16(.79)	4.13(.74)	4.21(.87)	-.55	.10
Q08 気の合う人と出会えた	4.03(.96)	3.96(1.01)	4.15(.90)	-1.04	.20
Q09 この大学の良いところがみつかった	3.45(1.07)	3.31(1.13)	3.65(.96)	-1.69	.32
Q10 自分の気持ちを率直に表せるようになった	3.33(.92)	3.39(.87)	3.23(.99)	.96	.18
Q11 上級生を見習いたいと思った	3.61(1.11)	3.41(1.05)	3.90(1.13)	-2.41	* .46
Q12 同級生の新しい一面を知ることができた	4.13(.81)	4.07(.83)	4.23(.78)	-1.05	.20
Q13 大学生活が楽しくなった	4.01(.90)	3.86(.92)	4.23(.83)	-2.24	* .42
Q14 このような行事をもっと開催してほしい	4.07(1.03)	3.96(1.03)	4.23(1.02)	-1.42	.27
Q15 大学に対する所属意識が強くなった	3.70(.90)	3.59(.90)	3.85(.88)	-1.58	.29
Q16 みんなとうまくやれた	4.18(.87)	4.14(.88)	4.25(.86)	-.67	.13
Q17 球技祭を楽しむことができなかった	2.39(1.32)	2.61(1.27)	2.06(1.34)	2.24	* .43
Q18 自分がみんなの役に立っていると思えた	3.16(1.06)	3.25(1.05)	3.02(1.06)	1.18	.22
Q19 ありのままの自分でいられた	3.57(1.05)	3.54(1.08)	3.63(1.00)	-.46	.09
Q20 みんなの輪に入ることが難しかった	2.08(1.01)	2.20(.95)	1.92(1.09)	1.49	.28

※ Q04、Q17、Q20は逆転項目

() 内は標準偏差

** $p < .01$ * $p < .05$

一方、全体の平均値が低めの項目を探してみると、項目2「自分の好きなことができた」、項目6「上級生に対して親しみがもてた」、項目9「この大学の良いところがみつかった」、項目10「自分の気持ちを率直に表せるようになった」、項目18「自分がみんなの役に立っていると思えた」の5項目はいずれも平均値が3.50未満であった。これらは本球技祭では実感されにくい事柄であったといえる。さらに項目4「時間をもてあまして困った」、項目17「球技祭を楽しむことができなかった」、項目20「みんなの輪に入ることが難しかった」の3項目は逆転項目であるために、平均値が低くなっている。平均値が低くはなっているものの、球技祭を楽しめなかったと感じていた学生も少数ながらいたことには留意する必要があるだろう。

項目ごとの平均値を男女別にみると、逆転項目と項目10を除けば、いずれの項目も女性の方が男性よりも平均値が高い。逆転項目についていえば、女性の方が男性よりも低得点である。したがって、女性の方が球技祭の効果について全体的に高く評価していることがわかる。女性の方が球技祭を楽しみ、有意義なものとして受け止める傾向が強いようにも思われる。それぞれの項目について t 検定を行ったところ、項目6「上級生に対して親しみがもてた」、項目11「上級生を見習いたいと思った」、項目13「大学生活が楽しくなった」、項目17「球技祭を楽しむことができなかった」の4つの項目に有意差が認められた。特に項目6の効果量は中等度であり、女性は男性よりも「上級生に対して親しみがもてた」と評価していることが認められた。他の項目の効果量は低いが、それでも女性の方が有意に高く（逆転項目である項目17は有意に低く）評価している。

4.3.2 評定項目に対する因子分析

次に、20の評定項目に対する因子分析を試みた。初期解の推定には一般化した最小二乗法を用いて、因子の回転にはプロマックス回転を行った。Kaiser-Guttman基準とスクリープロット基準とから、因子数は3因子が妥当であると判断した。因子分析を行う過程で、複数の因子に高く負荷している項目や因子負荷量が0.40未満の項目を除外し、複数回の因子分析を行った。除外した項目は、項目2、項目3、項目4、項目12、項目17の5項目である。

最終的には表4-2のような結果になった。因子Ⅰは「大学に対する所属意識が強くなった」、「自分がみんなの役に立っていると思えた」、「ありのままの自分でいられた」などの7項目に高く負荷していた。これらの項目は、大学に対する所属意識や率直な自己の感情表現、他の学生との連帯感などに関係する項目であると考えられた。そこで因子Ⅰを「大学に対する所属意識」の因子と命名した。因子Ⅱは「上級生を見習いたいと思った」、「この大学の良いところがみつかった」、「大学生活に対する不安が和らいだ」などの5項目に高く負荷していた。これらの項目は、新入生が大学に対して慣れて親しみだしたことを示す項目であると考えられた。そこで因子Ⅱを「大学に対する親近感」の因子と命名した。因

表 4-2 因子分析の結果

項目内容	因子 I	因子 II	因子 III
Q15 大学に対する所属意識が強くなった	.82	.28	-.26
Q18 自分がみんなの役に立っていると思えた	.82	-.01	-.17
Q19 ありのままの自分でいられた	.78	-.15	.07
Q10 自分の気持ちを率直に表せるようになった	.63	.05	-.04
Q16 みんなとうまくやれた	.58	-.12	.39
Q14 このような行事をもっと開催してほしい	.49	.11	.17
Q20 みんなの輪に入ることが難しかった	-.48	.21	-.22
Q11 上級生を見習いたいと思った	-.07	.92	-.08
Q06 上級生に対して親しみがもてた	-.06	.81	.01
Q09 この大学の良いところが見つかった	.18	.55	.17
Q05 大学生活に対する不安が和らいだ	-.13	.45	.33
Q13 大学生活が楽しくなった	.29	.43	.28
Q08 気の合う人と出会えた	-.11	.07	.93
Q01 友人関係が広がった	-.13	.04	.74
Q07 みんなと打ち解けることができた	.39	-.05	.59
因子間の相関係数	因子 I	.53	.67
	因子 II		.49

因子Ⅲは「気の合う人と出会えた」、「友人関係が広がった」、「みんなと打ち解けることができた」の3項目に高く負荷していた。これらの項目は、球技祭をとおして友人関係が形成される様子を示すものである。そこで因子Ⅲを「友人関係の形成」の因子と命名した。それぞれの因子に対して α 係数を算出したところ、因子Ⅰの α 係数は0.86であり、因子Ⅱは0.83、因子Ⅲは0.82であった。いずれも十分な値であるといえよう。

これら3つの因子について、全体の平均値と男女別の平均値とを求め、それらを表4-3に示した。表4-3には、男性と女性との平均値差の検定(t 検定)の結果も示した。男性と女性とではどの因子も平均値が高いのだが、因子Ⅱには5%水準で有意差が認められた。効果量はそれほど高くはないものの、「大学に対する親近感」については女性の方が高く評価しているといえることができる。

表 4-3 各因子の全体の平均値および男女別の平均値と t 検定の結果

因子	全体(N=119)	男性(N=71)	女性(N=48)	t 値	d
因子Ⅰ (大学に対する所属意識)	24.92(5.02)	24.68(5.15)	25.29(4.85)	-.66	.12
因子Ⅱ (大学に対する親近感)	18.09(4.09)	17.31(4.00)	19.25(3.99)	-2.60 *	.49
因子Ⅲ (友人関係の形成)	12.55(2.12)	12.42(2.18)	12.73(2.03)	-.77	.15

() 内は標準偏差 * $p < .05$

4.4 考察

アンケートに用いた 20 項目を一つ一つ検討してみると、「友人関係が広がった」、「みんなと打ち解けることができた」、「気の合う人と出会えた」などの項目は平均値が 4.00 を超えていた。したがって新入生に対して球技祭を開催することは、新たな友人関係を形成することの一助となっており、大学生活に対する適応支援として有効であることを示唆している。「このような行事をもっと開催してほしい」という項目に対して肯定的な回答をした学生も多く（平均値 4.07）、本球技祭が好評であったことがわかる。

評定項目に対して因子分析を行った結果からは、「大学に対する所属意識」「大学に対する親近感」「友人関係の形成」の 3 つの因子が抽出された。このことから新入生に対する球技祭には、大学に対する新入生の親近感を高め、所属意識をもたらし、新たな友人関係の形成を助ける心理学的な効果があると考えられる。そして新入生に対して球技祭を実施することは、大学適応のための有効な支援になり得るといえる。

20 項目それぞれと 3 つの因子について、性差を検討した結果からは、女性の方が男性よりも全体的に肯定的に評価をしていた。特に「大学に対する親近感」の因子には有意差が認められた。本学の退学者数は、男性の方が女性よりも 2 倍以上も多い。女性の方が高得点であるということは、球技祭などの適応支援は女性の方が受け容れやすく、球技祭の効果がより高く現れることを示しているともいえる。あるいは、男性に対する支援をより充実させ、いっそうの工夫が必要であるとも考えられる。今回の研究では質問紙を用いて 3 つの因子を抽出することができたので、今後もこの質問紙を用いて球技祭による適応支援の効果をさらに検証する必要があるだろう。

5. おわりに

和井田 節子

教育学部が設置されて 3 年目の 2014 年 5 月、1 年生の適応促進を目的に第 1 回教育学部新入生歓迎球技祭が実施された。それ以降毎年 5 月に、2 年生の有志学生約 20 名による実行委員会を教員がサポートすることで球技祭は継続されている。球技祭を開始してから入学する学年の退学率が減少した。そこで本研究では、新入生の適応の効果を質問紙を用いて検討した。また、2 年生の実行委員の達成感も強く、その後に多方面で積極的に活動する学生が多く出ており、2 年生にも教育的な効果があると推察された。そこで、2 年生の実行委員にも質問紙調査を行い教育効果を検討した。影響を与えているという教育的成果と課題とを整理・検討するという研究課題を解決するために、2016 年 5 月に行った第 6 期生に対する新入生歓迎球技祭を研究対象として、事前準備の記録と、事後に行った質問紙調査とを中心に検討した。

1 年生の適応に関しては、質問紙調査から、球技祭は効果的であったことが確認できた。

その内容としては、「友人関係の形成」に寄与しただけでなく、「大学に対する所属意識」や「大学に対する親近感」も増しており、女子の方が男子よりもその傾向が強かった。これは、男女混合チームで行われる球技祭で、球技が苦手な女子も楽しめるような工夫が成功したことを示している。「大学に対する親近感」の中には、上級生に対する敬意や親しみの項目も含まれており、2年生の実行委員会による企画運営という在り方が、1年生に大学に対する肯定的な印象を与えたと推察できる。また、大学や学生同士への肯定的な印象は、知らない人と出会うことへの不安を和らげたり、球技祭で協力できた経験を授業のグループ発表でも活かすようになったりなど、その後の大学生活にも良い影響を与えていることが推察できる自由記述も多くあった。

2年生の実行委員に関しては、教員側はプロジェクトマネジメントを教える場としても位置づけた。プロジェクトマネジメントリテラシとして、伊東(2013)は、(1) チーム・ビルディング(チームづくり、コミュニケーション)、(2) チーム憲章(コンセプト・シート。目的・運営理念・行動指針等を明らかにし、共有する)、(3) ガントチャート(1週間を単位としてチームの作業予定と実績の差異(予実差)を視覚化し、全体としての進捗状況を全員で把握・共有する)、(4) 実践とふりかえり(QCD:品質・コスト・納期を意識した実践、責任、振り返りと修正)の4領域を挙げている。

教員側が、これらのプロジェクトマネジメントリテラシを意識して実行委員会を支援したのは、第2章で述べたとおりである。(1) チーム・ビルディングに役立ったのは、スタッフ会議とSNS(LINE)を使った日常的な情報共有であった。(2) チーム憲章については、①1年生同士が仲良くなり、②球技が得意でも不得意でも楽しめて、③当日1年生が時間をもてあますことがないような種目・ルール・プログラムの企画と運営というコンセプトが何度も共有された。(3) ガントチャートについては、学生だけでは作れなかったために教員が例示することで、作業予定の立て方を学ばせた。(4) 実践と振り返りは、週2回の実行委員会スタッフ会議に教員が参加してやり方を伝えた。2か月後に行った自由記述には、それぞれの領域にかかわる記述が多く見られ、プロジェクトマネジメントリテラシを学ぶ場になっていたことが確認できた。

教員は、PBL(Project Based Learning)型演習の手法を取り入れつつ、プロジェクトマネジメントリテラシを教えるという態度で実行委員会に接した。それは、内容の質は担保しつつも、実行委員会の自主性を最大限に重んじるという姿勢であった。終了後の達成感を味わったと記述した実行委員が多かったが、自分たちの力で成し遂げたという実感があつたからであろう。球技祭の企画運営で教員が支援した内容については、記録の意味もあり、その意図と内容とを本稿第2章に詳述した。学生の主体性を尊重しつつも、教師になったときに役に立つスキルや、プロジェクトマネジメントリテラシの伝達過程を整理した。

球技祭では、担当教員が実行委員会を支援するとともに、授業にも活用することで、教

育的な成果を引き出すことができた。さらに PBL 演習型の協同学習形式で実行委員会を動かしたことが、プロジェクトマネジメントリテラシの育成と定着に効果的であったこともある程度確かめられた。

PBL 演習型協同学習も、プロジェクトマネジメントリテラシも、教職において活用できるものである。しかし、このような活動は、本学教育学部では球技祭のみである。授業や行事の中にも、意図的継続的に PBL 演習型協同学習を組み込むことができると、さらに効果は上がると考えられる。今後の課題は、異学年交流も含む PBL 演習型協同学習を球技祭以外の大学の行事や授業の中にも組み込んで、プロジェクトマネジメント力を高める学習を継続的に行う可能性をさぐることである。

引用文献・参考文献

- 古田雅明・中村紘子・香月奈々子・加藤美智子・田中優・西河正行・福島哲夫・堀洋元・向井敦子・八城薫, “新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析”, 『大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究』, 14号, 2012, pp.59-70.
- 伊東洋一, “PBL 型演習の実践と効果” 『情報科学研究所所報』(専修大学情報科学研究所), No.81, 2013, pp.6-7.
- 黒澤 毅, “新入生オリエンテーションキャンプの効果”, 『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』, 3号, 2006, pp.59-68.
- 日本中退予防研究所, “中退白書 2010 - 高等機関からの中退” NEWVERY, 2010.
- 齋藤仁志, “PBL によるプロジェクトマネジメント能力の育成” 『現代社会学部紀要』(長崎ウエスレヤン大学現代社会学部), 14巻, 1号, 2016, pp.7-11
- 佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之, “新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について (2) - 複数学科のデータに基づく分析 -”, 『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』, 7, 2008, pp.15-22.

